

## 第116回 近畿救急医学研究会

大阪医科大学 救急医学教室 教授 高須 朗

平成30年7月15日（土）に京都府民総合交流プラザ京都テルサにて第116回近畿救急医学研究会を開催したことをご報告申し上げます。今回の学会開催にあたり、本学医師会から多大なご援助を賜りましたことをあらためて御礼申し上げます。

本学会は40年以上の歴史を持ち、救急医療に携わる医師・看護師・救急隊員等が一同に集まり活発な討議が行われております。本学の救急として学会運営は初めてであり、大変不安もありましたが、教室員一同、一生懸命準備を行い、また病院看護部からの応援も頂き、無事、大役を務めることができました。

当日は総勢830名の参加者を得て、55題もの演題を頂戴して実り多い学会となりました。午前是一般演題中心のセッションで、医師部会で6セッション、看護部会2セッションと教育講演1題、午後は今回のテーマである「救急医療の起承転結・さらなる連携を求めて」の関連のシンポジウムと教育講演を2題組みました。さて、テーマですが、起承転結がうまく行くと物語の文章が美しくなると言われています。医療でも同じで、特に救急医療では、救急搬送システム、プレホスピタル、急性期治療、リハビリ、そしてADL

改善へと、起・承・転・結が独立するものではなく、お互いの深い連携が機能してこそ素晴らしいものになります。大学内での他職種や他科との連携にも通じるものがあると思います。シンポジウムでは医師のみならず、救急隊員、看護師、ソーシャルワーカーなど幅広い職種から演者を募り「連携」の問題点やその解決策について討議をしました。はっきりとした結論までなかなか到達できませんでしたが、「顔」の見える信頼関係の構築することの重要性を再認識できました。シンポジウムの基調講演では、岐阜大学大学院医学系研究科救急・災害医学教授の小倉真治先生に「救急搬送システムに関わる諸問題」について、本学総合医学講座リハビリテーション医学教授の佐浦隆一先生に「急性期リハビリテーションの現状と課題」についてお話していただきました。今回のテーマに沿ってお話を頂き、参加の皆様にも好評を得ました。両先生にもあらためてお礼を申し上げます。

たった一日ではありましたが、1年かけて準備を行い、各関係者から色々のご支援を賜り、大盛況に学会を終了することができました。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



教室関連スタッフとの集合写真